

戦争体験した人間です。昭和14年1月26日生れ 7人兄妹の末子です。一番上の兄は陸軍に召集されてシベリヤで捕虜にされ、8年目の最後の引き揚げ船で帰ってきた人間です。

二番目の兄は海軍で台湾より、三番目の兄は佐世保より終戦で帰る。

昭和19年はだんだん戦争が激しくなり、熊本市内より親戚の家族の2軒が疎開^{そかい}して来た。大人3人、子供5人の8人と、私たち家族6人（子供4人）の計14人が一緒に暮らし始めた。

昭和20年4月に2人が小学校に入学したのですが、入学式は中庭で名前を呼ばれただけと頭に残っています。学校よりの本も何箇所と消されていました。

一日目の授業が始まるので、机の上にノート、筆箱、クレヨンを出し、先生の話を聞いていると、空襲警報のサイレンがけたたましく鳴り出し、あわててカバンに入れようとして、新しいクレヨンがバラバラと下に落ち、折れたり無くなったりして探していると、姉・兄が迎えに来るので、家にいる9人が辻の峰の山坂を抜けて家に帰り防空壕^{ぼうくうごう}に駆け込む繰り返しが続く。近くの人間は学校の防空壕には入れない事を後から知った。

空襲が解除しても安心して遊ぶことはできず、夜も子供だけが防空壕の中で寝るが夜になると熊本市内の方の空が真っ赤に焼けている。聞くと爆弾が落ちて燃えているのだと教えてくれた。私たちは田舎で何時も頭の上をものすごい爆音で戦闘機が何機も山スレスレで通り過ぎて行く。ちよつと動きが見えたら何回も回って来るので、防空壕で通り過ぎるのを待っていた時です。地響きで外に飛び出すと、父が近くに爆弾が落ちたと言って集会場に出かけて帰るなり兄たちと同年代の人が畑から帰る途中に爆弾が落ちたらしいと言われ、本当に怖く、防空壕より出られなかった。それから間もなくして日本は戦争に負けた。

昭和20年8月15日、天皇陛下の言葉がラジオから流れると、隣近所の人たちが集まって、今から日本はどうなるのかと口々につぶやき、泣き崩れる人もいた。私たちはあまり意味も分からず、これからは逃げなくてもよいと思った。

終戦になり疎開して来ていた人たちも、それぞれ我が家に帰って行き、

元の家族だけになった。それから兵隊さんが次々と復員してきた。

私の兄も、3番目、2番目と下から順に帰ったが、一番上の兄は消息不明で、生きているか死んでいるかわからない状態で、引き揚げ船も無いと言われていた時です。シベリヤからの最後の引き揚げ船の中に兄の名前があった、と津森役場より知らせを受けたが、いまままで何度と同じ事を聞いて信じられないと父が確かめに行き、兄と知りました。

その日のために、津森役場より熊本駅までバスで迎えに行くと言われ、また、小学校でも迎えるためにお帰りなさい、ご苦労様と言う歌を作って下さり、その時間に合わせ小学校の正門前で小旗を振りながら迎えて下さり、兄は夢のようですと感動した後、我が家につくと沢山の人たちに迎えられた。

兄は私が3、4才の頃に兵隊に入隊し、昭和23、4年に無事に帰れた事に感謝しながら、お礼を述べた兄の顔を今も忘れません。

また、シベリヤでの話を聞かれると、自分は兵隊に行くまでは、親不孝で何時も農家なのに何ひとつ手伝わず、友達と阿蘇の鞍岳山まで馬を走らせ続け、好きなことをしてきた事がシベリヤに連れて行かれて役に立ち、生き残ったのは、一面が深い雪山の木を伐採した後の木を引き出すために、野生の馬をつかまえて調教し、深い雪山より木を引っ張り出す仕事を命懸けでしないと、寒さと飢えで仕事しながら動けなくなり人も助けられず捕虜の人間は何時も監視され過酷な生活の様でした。

兄は馬を掴まえて調教することで馬にやる人参を炊所に取りに行くのにも自由に出入りが出来て、食べ物も炊所の人達にもらう事が出来て、生き伸びて帰る事が出来たと何時も聞かされました。

一番上の兄も、2人の兄弟も既にこの世を去り語り継ぐ人間もいないので、私が知る限りをペンにしました。